

## 携帯竿秤 さおばかり

資料提供

松井 清治

文 國枝 浩



度量衡どりようこうといって昔から長さ、容積ようせき、重さを計る道具は、物指ものさし、榼ます、秤はかりで、それぞれ尺しちやう・寸すん・升しやう・合ごう・貫かん・匁もんめが単位でしたが、昭和34（1959）年にそれらいわゆる尺貫法しちやうかんぽうが廃止され、メートル法に変わり、メートル（米）リットル（立）グラム（瓦）になって、その換算にてこ

摺すったものです。

そのため、今まで持っていた物指には上下二段で寸と糶センチ、一升榼には一・八立リットルの焼印が、台秤の物指にも二段に貫と匁キログラムが付いたのがメートル法移行後、何年かは通用しておりました。

しかし今では物指は巻尺、木榼はガラス

か金属、秤はバネか電気式が普通です。

このレトロ館シリーズでも医薬用天秤（13・37号）や農用の木榼や竿秤（25・95・125号）に掲載されてご存知だと思います。竿秤の錘おもりは大抵が釣鐘型ですが、丸い球型で一貫六百匁秤が出てきました。

提供者の先々代が商用かに使ってみえたように、ケースの革袋のマークから大垣の製造元北村度量衡商会の物と思われるます。

ちなみに六尺は一間けん、十尺は一丈じやうと建築には今でも使っていますが、砂糖だけは一斤きんが単位で（百六十匁）が普通でした。

神戸一斤と池野一斤と呼ぶ競争値段もありました。また、昔、出産時、助産婦さんは男児ですと、「三百二十匁ですよ！」と祝詞の意味で云われましたね。

協力 郷土史の会